

ふるさととは母 ふるさととは命

政治の中身を変ええる第一歩を！

今年はこの位置から尾神岳の写真を全国に発信します。どこかおわかりでしょうか。私のホームページ『小さな町の幸せ通信』のアドレスは一番下にあります。

新年の抱負

雪が少ないなかで2009年を迎えました。昨年は震災からの復興の年でした。大きな災害がなかったことを何よりも喜びたいと思います。

昨年、これまでの大企業中心、アメリカいいなりの悪政の矛盾が一挙に噴き出した一年となりました。

年末年始のテレビで「年越し派遣村」のことが連日放映されていましたが、この問題は東京だけの問題ではありません。上越市内でも非正規労働者は全体の3割を超え、「雇用崩壊」とも言うべき事態が起きています。中小企業の経営危機も深刻化し、このままでは地域経済が崩壊しかねない状況となっています。市の経営改善支援資金の申し込みは前年の7倍以上、128件（12月25日現在）にものぼりました。昨年4月にスタートした後期高齢者医療制度は、高齢者の皆さんから猛反発を受け、見直し・廃止へと動き始めています。外国からの輸入農産物に頼った食料政策も転換せざるを得ない事態に追い込まれています。

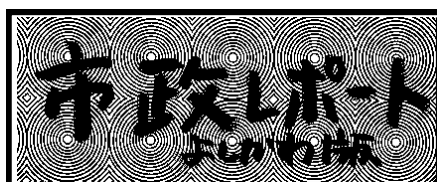
さて、上越市は14市町村が合併して5年目に入りました。合併を推進した人たちは、合併の最大のメリットを「財政基盤の強化」にあるとしていましたが、交付税の大幅カットなどにより、厳しい状況となっています。新年早々には地域事業費の見直しや地域協議会に諮問される予定です。また、通学援助費、通学バス制度の基準見直しなども大きな課題となります。

今年も総選挙の年でもあります。いまの悪政を変える確かな第一歩を踏み出したいものです。私は吉川区選出の議員として、国政問題でも市政問題でも区民の皆さんのご意見をお聞きしながら頑張りたいと思います。

上越市議会議員 橋爪法一



写真はソシンロウバイ



NO 1378
2009.1.4

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪法一
Tel 548-3628 (有線) 4867
E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp
URL <http://www.hose1.jp/>

春よ来い 第一〇一回 指相撲

妻の実家へ新年の挨拶に出かけた時のことです。義父母や義姉夫婦などと一緒に食事を済ませた後、義父と妻が、指相撲を始めました。義父のベッドに腰をかけ、親子で勝った負けたとやっっている光景を見て、思わず微笑んでしまいました。

指相撲は、人差し指から小指まで、お互いしつかりと組んで、親指だけを動かして相手の親指を一定時間押さえつけた方が勝ちになります。力だけでなく、瞬時に相手の親指を押さえこむ巧みさも求められる遊びです。盛んに親指をくるくる回しながら、つかまえようとして逆に押さええられてしまった妻。「わー、父ちゃん、やっぱり強いわ」「じゃ、今度は左手でやるさ」などとはしゃいでいました。

結婚してから三十数年、正月と盆には必ず妻の実家を訪問してきましたが、親子がこんな遊びで盛り上がる姿は見たことがありませんでした。親は八十代の半ば、子は五十代の半ばです。ともに子を持ち、親子関係のいろんな場面を経験してきています。お互いそれ相応に年を重ね、昔に戻って楽しむときの心地よさを知っていることもあると思います。でも、それだけではない、何か、微妙な変化が生まれているような気がしました。

先日、妻から興味深い話を聴きました。たしか、十二月議会で私が忙しかった頃だったと思います。「俺は行けないよ」と言ったところ、妻が一人で実家に遊びに出かけました。夜遅くなってしまう、その夜、妻は柏崎の実家に泊まることになりました。嫁ぎ先が近いこともあって、泊まるのは数十年ぶりでした。十一時半過ぎまでたっぷりおしゃべりを楽しんで、さあー寝ようという段階になって、妻がどこで寝るかをめぐり義父母の間で「引き合い」が始まったというのです。「ここで寝ればいいくて。コタツのそばで寝ろや」「わたしの横で寝るよね。あったかいよ」。軍配は、言葉に力のある義父でなく、暖かいカーペットの上にサツサと娘用の布団を敷いた義母に上がりました。

義父母と妻の間に微妙な変化が生まれたのは、持病の間質性肺炎が悪化して義父が緊急入院した一昨年の五月以降です。

緊急入院した柏崎の義父が一月後に退院して、自宅で療養生活するようになってから一年と七か月になりました。この間、人工呼吸器を付けたままになるかどうかの瀬戸際のところで自呼吸を再開した父親の生命力に感動したということがあります。「夏場を越えることができればいいのですが」とまで医師に言われていたにもかかわらず、二回の夏場を無事乗り越えることができた父親にたいして愛（いと）おしさが増したこともあるでしょう。義母も体力を落としつつあります。どうあれ、妻は、親がこれ以上以上に大切な存在として感じられるようになったのだと思います。

義父は、デイサービスには一週間に一度だけ行きます。後は、在宅酸素療法をやっていることもあって、ほとんど外出しません。居間だったところには義父のベッドが置かれ、そこが義父の普段の生活空間となっています。トイレ、お風呂、それと「自分の仕事」にしている一階のカーテンの開け閉め以外はベッドの上での生活です。

これまで更年期障害からなかなか脱出できず、両親に心配をかけてばかりいた妻も、最近では、実家を訪ねることが多くなりました。自分が訪ねることで両親が生き生きする姿を見ることができるようになりました。ひよつとすると、指相撲は実家へ行くたびに父親とやっていたのかも知れません。

新年度予算編成で89項目の要望 日本共産党上越地区委員会と議員団



日本共産党上越地区委員会と党市議団は12月26日、上越市長に対して新年度予算要望書を提出しました。

この日は木浦市長が公務の都合で出席できず、中川周一副市長が応対しました。

今回の予算要望書には、①金融危機などの景気悪化から雇用と中小業者を守る緊急対策、②当面する市政の重点課題、③市民が安全、安心に暮らせる医療・福祉の充実、④すべての子どもたちへのゆきとどいた教育の実現、⑤食の安全を確保し、意欲ある農家・生産組織が安心して励める農業生産、⑥市民の安全を守る各種対策や市民負担の軽減、⑦各地域固有の問題、の7つの分野、89項目が盛り込まれています。

提出にあたっては、私が代表して要望書の概要について説明しました。

要望書の特徴は、景気悪化から雇用と中小業者を守る緊急対策を一番に据えたことです。市内でも派遣労働者の期限前解雇や雇い止めなどが広がっていますが、市民の雇用を守るために、実態の掌握をおこなうこと、派遣社員、期間社員をはじめとする大量解雇、雇い止めを中止し、雇用を維持するための最大限の努力をするよう、経済団体・企業にたいし指導と監督、要請を強化することを求めました。とりわけ、市が補助金などを交付している企業に対しては、特に強い指導を行うことを求めました。

また、昨年10月に実施された部分保証制度＝「責任共有制度」は、民間金融機関の貸し渋りを助長する役割を果たしていることから、この部分保証制度の中止を国や関係機関に求めることや緊急生活支援小口融資制度を新設すること、市内小規模事業者の受注機会の拡大に資するよう小規模修繕契約希望者登録制度の見直し（契約金額の上限引き上げなど）を進めることも要望しました。

吉川区に関する要望は、これまでの「橋爪法一を囲む会」などでお寄せいただいたことなどを盛り込みました。河川、道路、防犯灯関係など8項目です。

要望書に対する回答は来月、文書で示されます。吉川区の要望に関しては、その時点で全文をお知らせする予定です。